基礎看護学（基礎看護領域）

1　構 成 員

	平成21年3月31日現在
教授	1人
准教授	1人
講師（うち病院籍）	1人　　（　0人）
助教（うち病院籍）	1人　　（　0人）
助手（うち病院籍）	0人　　（　0人）
特任教員（特任教授，特任准教授，特任助教を含む）	0人
医員	0人
研修医	0人
特任研究員	0人　　（　0人）
大学院学生（うち他講座から）	0人
研究生	0人
外国人客員研究員	0人
技術職員（教務職員を含む）	1人
その他（技術補佐員等）	0人
合　　　計	5人

2　教員の異動状況

加藤　和子（教授）　（H20. 5. 16～現職）
宮島多映子（准教授）　（H18. 4. 1～H18. 10. 31講師；H18. 11. 1～現職）
木山　幹恵（講師）　（H14. 4. 1～H18. 3. 31助手，H18. 4. 1～現職）
山本恵美子（助教）　（H18. 11. 1～H19. 3. 31助手；H19. 4. 1～現職）
村松　妙子（教務職員）　（H20. 9. 1～現職）

3　研究業績

数字は小数2位まで。

	平成20年度
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	2編　　（　1編）
そのインパクトファクターの合計	0
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	0編
(3) 総説数（うち邦文のもの）	0編　　（　0編）
そのインパクトファクターの合計	0
(4) 著書数（うち邦文のもの）	0編　　（　0編）
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	0編　　（　0編）
そのインパクトファクターの合計	0

（1）原著論文（当該教室所属の者に下線）

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1．Taeko Miyajima： Evaluation of the Efficacy of Miyajima's Abdomen Pressing Method with Regard to Promoting Timely Defecation, on the Basis of Bowel Sounds. Medicine and biology, 152(8): 320-328, 2008.

インパクトファクターの小計　［0.00］

C．筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの

1．岡崎由美，宮島多映子：白と青・緑の色のイメージが身体（循環動態），心理に与える影響，医学と生物学，152(10): 443-449, 2008.

インパクトファクターの小計　［0.00］

（4）著　　書

A．筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1．加藤和子，村島さい子，瀬戸口要子（編集，改訂）：基礎看護学　看護管理，ナーシング・グラフィカ（20），メディカ出版，2008

4　特許等の出願状況

	平成20年度
特許取得数（出願中含む）	0件

5　医学研究費取得状況

	平成20年度
(1) 文部科学省科学研究費	1件　（ 50万円）
(2) 厚生科学研究費	0件　（　0万円）
(3) 他政府機関による研究助成	0件　（　0万円）
(4) 財団助成金	0件　（　0万円）
(5) 受託研究または共同研究	0件　（　0万円）
(6) 奨学寄附金その他（民間より）	0件　（　0万円）

(1) 文部科学省科学研究費

宮島多映子（代表者「Miyajima式腹部圧迫法の臨床応用－安全性と有効性の評価－」50万円（継続）

7　学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0件	0件
(2) シンポジウム発表数	0件	0件
(3) 学会座長回数	0件	0件

(4) 学会開催回数	0件	0件
(5) 学会役員等回数	0件	2件
(6) 一般演題発表数	1件	

(1) 国際学会等開催・参加

5) 一般発表

ポスター発表

1. Mitsuyo Kawashima, Mikie Kiyama：Nursing Aid Provision Deriving from Empathy Towards Patients with Excretion Difficulties, EAFONS, 2009march, Japan

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

1. 加藤和子　日本医療マネジメント学会 評議委員
1. 加藤和子　日本臨床医療福祉協議会 評議委員

8　学術雑誌の編集への貢献

	国　内	外　国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	0件	0件

9　共同研究の実施状況

	平成20年度
(1) 国際共同研究	0件
(2) 国内共同研究	0件
(3) 学内共同研究	0件

10　産学共同研究

	平成20年度
産学共同研究	0件

12　研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 看護学生に対する「危険予知トレーニング」の教育効果の検討

研究期間：平成20年７月～平成21年３月末浜松医科大学　学内プロジェクト研究（看護学対象）

医療安全トレーニング（以下，KYT）をA大学２年次生・３年次生を対象に，学生のレベルに合わせたリスクセンスを高めるトレーニングとして導入し，メタ認知能力とセルフ・モニタリング能力（以下，SM能力）を促進する教育効果を明らかにし，看護職の職責自覚への影響を検討することを目的に，質問紙調査・面接調査を実施した。その結果，看護学生にKYTを実施することで，SM能力とメタ認知能力の育成に効果があることが示唆された。また，実習終了後に行った半構成法による面接調査では，臨床現場における高度な安全管理を促すために，看護基礎実習においてKYTの教育効果が認められ，早期教育が可能であること，臨床現場において個々の学生のメタ認知能力に合わせた関わりが重要であることが示唆された。21年度日本看護管理学会，日本看護研

究学会にて発表予定。
（山本恵美子，坪見利香，木山幹恵，宮城島恭子，宮島多映子，大見サキエ，加藤和子）。